

スリランカ民主社会主義共和国は、北海道の8割位の広さである。「ジャフナ」はスリランカ9州の1つ、北部州に在る。その変遷を辿っていくと、実に2500年の歴史を持っている。民族や言語・宗教が絡み合うスリランカを構成する特殊な地域であろう。内戦時のシンハラ人とタミル人の紛争激戦地であった。16世紀までの一時期には、ジャフナ王国の都があった。ジャフナにはかなりのヒンドゥ教徒が定住していた。

ところで、『大王統史』第1章「如来来降」に、釈迦成道後5年目のチツタ月(4月)新月の日、マホーダラ王とチューロダラ王の争いを止める為、ナーガディーパ(現在のジャフナ半島)に、釈迦が上陸されたことが記されている。又、第19章「菩提樹来島」には、アショカ王が仏滅後218年に即位し、その18年後マーガシラ月(12月)満月に、王女のサンガミッタ比丘尼が菩提樹の分け木を持って、ジャンブコーラ(現在のジャフナに在る港)に到着されている。ルーツを辿れば、インド大陸の民族と宗教である。その底辺は、仏教とヒンドゥ教を中心とする思想が混在している。今日、残されている遺跡や顕彰碑は、如実にそのことを語っている。紛争と融和を象徴されたものである。私は敢えて、融和(ハーモニー)をタイトルに選んだ。

民族の抗争

紀元前483年にシンハ(獅子)の子孫と称するヴィジャ王が、シンハラ人を連れて来島し先住民を征服したという建国神話から、スリランカが始まる。以降、王政が敷かれ、数多くの変化を遂げながら王国が、1815年、イギリスの植民地になるまで約2300年も続いた。紀元前4世紀にアヌラーダブラに主都が置かれ、次々に困難なことに遭遇したと云う。紀元前3世紀にマハー・ヴィハー

ラ(大寺)を建立、以来、歴代の王の庇護もあって仏教が広がって行った。

紀元前2世紀に南インドよりタミル王朝の移民がシンハラ王朝に侵攻を始めた。B.C.164年、当時のドゥッタガーマニー王がタミル人からアヌラーダブラを奪還、ルワンウェリ・サーヤ大塔を建造した。B.C.89年、ワラガムバーフ王がタミル人に再び奪われたアヌラーダブラを取り返し、石窟黄金寺院を造った。4世紀、仏歯がアヌラーダブラにもたらされた。A.C.478年、カーシャバ王がシギリヤに遷都し、495年に陥落、王都はアヌラーダブラに戻された。1070年、ポロンナルワへ遷都するまで、タミル人が乗っ取った王朝が続いたり複雑を極める民族の歴史はここから始まったといえる。

13世紀タミル人がジャフナ王国を建て、シンハラ王朝は南に追われた。15世紀キャンディに遷都したが、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地となり、ヨーロッパ文化が流入した。スリランカ独立後、1956年シンハラ人とタミル人が各地で暴動を繰り返し、数多くの犠牲者を出した。

1983年に内戦激化し、2009年、内戦が終結して今日に至っているが、ジャヤワルダナ第2代大統領(1906～1996)が第二次世界大戦後のサンフランシスコ講和会議での演説で語った偉大なる仏陀のメッセージは、内戦当時のスリランカに届かなかったのであろうか。「憎しみは憎むことによって消えず、愛することによってなくなる」と。

内戦の犠牲者

ジャフナに行ってみたいと言ったら、パスポートのコピーを提出するようにと、スリランカ側の旅行社から要請された。内戦は終わっていても外国人には渡航制限があった。ジャフナはタミル人

が多く住んでいて住民はヒンドゥ教徒が絶対多数であるとのことによるそうだ。建物には銃痕^{じゅうこん}が残り、まだ地雷が埋められたままの所もあるらしい。インフラもろとも都市が破壊され、仏教寺院も崩壊してヒンドゥ教の寺院に変わっていたりするという。車の中から眺める景色は、犠牲者や傷痕と入れ替わるように平和が少しずつ近づいている気がした。ヴァヴニヤの廟の辺りで駐車した。内戦時に、或る若い兵士が身体に爆弾を巻きつけてゲリラの戦車(ブルドーザ)に飛び込み3000人の命を救った。その英雄像が祀られている廟に上がり、蘭の花を捧げ合掌した。この像が平和のシンボルとなって、永久に語りかけてほしいと願った。

どこか南インド風

2015年3月初旬とはいっても熱暑の極みで、ジャフナに向かって幹線道路を直走りに走った。町々に掲げられている看板の文字が、コロンボやキャンディの文字と違っている。「あれ、なーに？」と指差すと「タミル語だよ」と同行のソーマシリ師が答えた。家並も何処となく泥くさくて野暮ったい感じではあるけれど、懐しい風景に出遇った気がする。昔風の商店が連なっているけれど、却って趣があって南インドに行った気分になった。

北部州はドライゾーンで乾燥度が高く、窓を開くと熱風が襲ってきた。「ここはね、ココナツ椰子が育たない。固い実をつけるパルミナ椰子の林が景観を特徴づけているんだよ」とのこと。ならば植物が育つ種類も限られてくるのであろうと思いきや、地下水が豊富なので多くの野菜や豆類が栽培されているとのことである。ベジタリアンが多くて、料理もスリランカ料理というよりも南インド色が濃い。

途次、食事をするようになった。ロール・ワディ・パティス・カトレッツといったメニューは、タミル人の特色あるものだと常々聞かされて来た。食堂で働くタミル人に接したが、多少浅黒い肌のタミル人の感情表現には、日本人に似たとこ



カンタロダイ仏教寺院遺跡 ジャフナ市街の北郊にあり、50を超える直径2メートルほどの小仏塔と仏足石がある。約2000年前のものとする。(画像は「[Google Panoramio](#)」、説明は「[goo辞書](#)」より)

ろがあった。南インドのタミル語と日本語にも共通点を指摘される学者がおられるが、興味深いことである。

ジャンブコーラの仏教風景

ジャフナのジャンブコーラ港? にやっと着いた。何時間を要したであろうか。新しい仏教舞台に出遇ったという思いがした。サンガミッタ比丘尼がインドから菩提樹を運んできた所として、新しい寺院・仏塔・記念碑・顕彰碑・比丘像などが建てられていた。菩提樹が金色の柵に囲まれて、青青と茂っていた。それらをじっと見ていて、胸が熱くなった。何処も彼処も、人類の歴史は破壊と再生の繰り返しで続いてきたと思う。もうこの類^{たぐい}の争いは終わってほしいと願わずにはおられなかった。

12月の満月の日、サンガミッタ祭りが催される。ウエサクやスカンダ・エザラペラヘラなど、シンハラ^{タミル}の仏教とタミルのヒンドゥ教の信仰の共通点があり、融合もみられる。文化や風俗が接触して培われたものが、脈々と受け継がれている。内戦が終了している今こそ、シンハラ文化とタミル文化が共存共栄に向けて新しい文化を創出して欲しいと願う。スリランカに根強く伝わる仏の教えこそ民族融和の基点^{きてん}となるだろう。